

## 生活文化産業学

(第 1・3 木曜日 午後 14 時～／成徳学舎)

### 第 7 回 生活文化産業における情報管理の整備

担当:大倉 朗寛

～講義の流れ～

1. はじめに／情報管理フローの体系化について (14:00～／30分)
2. 生活文化産業における情報管理の重要性について (14:30～／30分)
3. 事業を継続・永続させるための情報管理について (15:00～／30分)
4. 【情報共有】ノート、リーフレット、ファイリング、名刺 (15:30～／10分)
5. ディスカッション、まとめ (15:40～／20分)

～内容～

1. はじめに／情報管理フローの体系化について (14:00～／30分)
  - ・生活文化と情報管理フローの体系化
    1. 「発信側」と「受信側」といった視点による分類  
情報管理は発信する側と受信する側によってフロー (情報の流れ) は異なる。  
「発信側」に関しては、蓄積 (ストック)、編集、発信に分類できる。  
「受信側」に関しては、受信、編集、保存 (ストック) に分類できる。
    2. 「現場型・訪問型」と「コンテンツ型」といった視点による分類  
前者は主に暗黙知、後者は主に形式知を介した情報管理フローとなる。
  - ・「受信側」における情報の入口
    1. 第 1 の入口 (=媒体) ※起点あるいは基礎となる視点  
情報の受け手側は必ず何らかの「媒体」を通じて情報を受信する。それぞれの「媒体」によって長所・短所があり、それらを把握することが重要となる。  
例) TV、ラジオ、携帯電話、タブレット端末、PC、リーフ・パンフ、五感 (体験)
    2. 第 2 の入口 (=場) ※第 1 の〇〇を展開または反転させた視点  
情報を受信するときの「場」によって情報の信頼度や理解度が異なる。  
例) 集会所、ショールーム、商店街 (ショッピングモール)、車内、会議室など
    3. 第 3 の入口 (=状況) ※第 3 の〇〇という視点からアイデアを創出  
情報を受信するときの「状況」によって理解される内容や記憶の深さが異なる。  
受信した情報の記憶は睡眠中に脳内で整理されると言われている。  
例) 起床後、朝食時、通勤時、勤務中、昼食時、帰宅時、夕食時、就寝前など

## 2. 生活文化産業における情報管理の重要性について（14：30～／30分）

低価格・高機能な新商品の開発を国際的に競うというよりも、必ずしも全く新しい商品でなくてもよいし、生きてゆくために必要最低限な機能（少機能）さえあればよい。そういった視点で生活文化に関連して行われる事業群としての生活文化産業を、年間25兆円規模（GDPの約5%程度、失業率約5%＝社内失業を含めて実質の失業率は10%以上＝約600万人以上を消化できる規模）で創出することが求められている、という仮説を立ててみると次第に大きな方向性が見えてくる。

たとえば、約600万人の仕事を創造することを想定すると、国際的に競争に勝てる様な新商品を開発するような事業群では、とても雇用を確保できるとは到底考えられない。特許などで重視される、市場競争に勝つための「新規性（新しさ）」よりも、日々の生活において生活基盤を安定させるための「継続性（継続しやすさ）」が重視されるべき産業と捉えられる。また、高収益の事業である必要もなく、どれだけ古くから存在して歴史的にも価値があり、その後どれだけ長く存続して価値を高め続けて永続させられる要素があるかを重視するという低収益ながら持続可能な事業群としての生活文化産業が想起される。

明治維新以後の近代化における過程として推進されてきた工業化あるいは大工業優先社会の構築において、破壊または捨て去られてきた「地域資源」、あるいは市民一人ひとりに蓄積されてきた「知識」や「経験」にあらためて着目して、ソーシャル・ネットワークあるいはコミュニティ（特定の地域や専門分野に興味をもつ人のつながりや集まり、活動など）によって相互に価値を高め合い、そこから創出される商品やサービスの生産と販売によって得られる収益によって事業が運営され、その集積として生活文化産業が形成されてゆくと考えられる。

そのような視点から、「ソーシャル」「コミュニティ」「プラットフォーム」といった場や人と人との繋がりを再生する事業群を、第3次産業（サービス産業）の発展形としての第3.5次産業、あるいは第4次産業と捉えると、その産業をベースとした「地域資源」のリサイクルの推進・普及という第5次産業も相乗的に振興され、6次化（第1次産業による加工と流通・販売への総合的な事業展開）の流れを加速させるということになる。

これから新しく形成されてゆくと考えられるこれらの産業は、より日常生活に密着した文化や自然、人と人とのつながりをベースとして形成されてゆくという点から、まさしく生活文化産業といえる。そして、IT産業のように既存の産業を侵食したり、破壊したりしながら形成されてゆく産業ではない。国際的な競争を強いられる既存の産業では、重視されなかった地域（特に中山間地域など）や分野（特に伝統工芸など）において、国際的な共創（一緒に創る）・協創（力を合わせて創る）という独創的な考え方で、既存の産業とも密接に連携しながらボトムアップ型で共存共栄的に形成されてゆく産業と捉えられる。

したがって、既存の産業に関して蓄積して管理している情報が生活文化産業を形成する知識基盤となり、それらの情報を効率よく収集してゆくことが、極めて重要となることは言うまでもないので、今回は前期の最終回ということで情報収集について解説させて頂く。

### 3. 事業を継続・永続させるための情報管理について（15：00～／30分）

前回、生活文化について情報発信を強化しようとするとき、情報の受け手側がどのような「場」や「状況」において、そして、どのような「媒体」を用いて受信するかという点について考えることが重要ということを解説させて頂いた。

今回は、その「媒体」の一つであるメールに関して、たとえば日々の作業において蓄積されるメールのデータをどのように保存するかという視点から、事業を継続・永続させるための情報管理について考えてみる。

たとえばメールのデータを保存する場合、以下の3種に分けられると考えられる。

- ① メールサーバ ※クラウド形式も含む
- ② ローカルPC ※携帯、スマートフォン、タブレット端末などを含む
- ③ 外部メディア（記憶媒体） ※CD、DVD、USBメモリなど
- ④ 紙ベース

メールのデータは、次々と①のメールサーバ上に格納され、保存・蓄積されてゆくが、データ容量を超えるとメール受信ができなくなる。データ容量は多かれ少なかれ無限ではないので、いつかは限界に達し、ある日突然、大容量のメールデータまたは添付ファイルが悪意の有無に限らず送信されたり、あるいはウィルスメールやスパムメールが短時間に大量に送信されたりして、メールサーバ上のデータが破損・消失する可能性が考えられる。

このような視点から、①のメールサーバ上で永続的にデータを保存するのは適さないと考えられ、複数かつ異なるハードウェアでメール受信できるようにしつつも、①のメールサーバ上には可能な限りデータは残さず、容量が残存した状況にしておくことが望ましい。

また、①のメールサーバ上のデータ保存としては、無料や有料など様々なクラウド形式のサービスが提供されているのが現状で、たとえば、Gmail は現時点で5GB程度の保存容量を無料で利用できるようになっている。

しかしながら、無料であるが故に、実際のところデータをどこまで責任をもって預ってもらえるかということは明示されていないのが現状で、今後、保存容量などサービス内容の変更や制限についてはサービス提供会社に依存せざるを得ない状況になっている。特に大切なデータを預けるクラウド形式のサービスについては、その辺りについて、しっかりと確認した上で、データ消失した場合などに備えて対策を講じておくことが望ましい。

次に、②のローカルPC上については通常、①のメールサーバ上に格納されたデータを、②のローカルPCをはじめ、携帯、スマートフォン、タブレット端末などにデータを受信する形となるが、この場合も、①のメールサーバと同様にデータ容量に制限があるので、そのデータ容量の範囲内で不要なデータを削除してデータを保存してゆくことになる。

ただ、②のローカルPCなどについては、ハードウェアそのものが破損や故障をしたり、あるいは盗難されたり、何らかの原因でOS（基本ソフト）が起動しなくなったりして、保存しているデータそのものが全く扱えない状況となってしまう可能性がある。このような視点から②のローカルPC上などで永続的にデータを保存するのは適さないと考えられる。

したがって、②のローカルPCなどハードウェアの破損や故障などに備えて、③の外部メディアに定期的に保存しておくことが重要であり、②と③を併用しながら、データ消失に備え、永続性を確保しておくというのが、メールに限らず、データを永続的に保存しておくための最も確実な方法と考えられる。

その中で、現時点ではUSBメモリがUSBを介してより多くのハードウェアと相互にデータを転送することが可能となるので、よりローリスクと考えられるが、机や書棚などへの収納性や取り出しやすさなどを考えると、CDやDVDへの保存も重要といえる。

さらに、USBメモリやCD、DVDなどに保存している場合でも、そこに格納されたデータを読み出すためのハードウェアが必要となり、それらのハードウェアを動かすためには必要最低限かつ十分な「電力」が必要となる。

特に、日本国内においては盛んに節電が呼びかけられている状況から、たとえ「電力」がなくても保存あるいは閲覧できる④の紙ベースでの保存も、閲覧や手書きのしやすさといった観点から重視されるべき保存方法といえる。また紙ベースでの保存は検索するのが難しいと考えられてきたが、その点については Evernote など紙ベースを電子データ化することにより、検索しやすくなるサービスも普及していることから、紙ベースでの情報管理も重要ということになると考えられる。

結論としては、特に重要な内容を④の紙ベースで保存しながら②のローカルPCなどと③の外部メディアを併用するのが、事業の継続性さらには永続性という視点から、現時点で最も確実なデータ保存の方法と考えられる。

#### 4. 【情報共有】 ノート、リーフレット、ファイリング、名刺 (15 : 30 ~ / 10分)

- ・ [生活文化産業学 | 市民大学院 \(文化政策・まちづくり大学校\)](http://bunka-seisaku.org/sbsg2011.html)  
<http://bunka-seisaku.org/sbsg2011.html>

#### 5. ディスカッション、まとめ (15 : 40 ~ / 20分)